

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 22 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22500942

研究課題名(和文)成人教育学の視点に基づいた生涯学習のためのeラーニングの構築と実践

研究課題名(英文) Research and practice of e-learning system for lifelong education on the basis of andragogy

研究代表者

向後 千春(Kogo, Chiharu)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号：00186610

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、オンライン大学に入学した社会人を対象として学習継続要因を調査した結果、以下のことが明らかになった。(1)ポジティブな要因としては、eラーニングでの受講形態、時間管理のスキル、学費の工面や家族の協力がある。ネガティブな要因としては、孤独な学習環境が心理的・物理的距離感に影響を及ぼす可能性が示唆された。(2)オンライン大学の学生は、学友とのつながりが、教員・教育コーチへのコミュニケーションに影響を与える要因となる。これらの結果は生涯学習のためのeラーニングシステムを構築するための示唆となるだろう。

研究成果の概要(英文)：This research project focused on the factors to sustain learning motivation of the adult students of the online university. The research revealed that learning by videos, skills for time management, and supports from students' family effect positively, and psychological and physical loneliness affects negatively. Also it revealed that students having many friends in online courses communicate better with teachers and learning mentors.

研究分野：教育工学

キーワード：生涯学習 通信教育 eラーニング 教材開発 メンタリング 生涯発達 ライフストーリー 人生の意味

1. 研究開始当初の背景

(1) 生涯学習の方法の1つとしてeラーニングが期待されている。eラーニングの一般的な長所は、時間と場所の制約を超えた学習を可能にすることだといわれている。このような長所を備えたeラーニングが、これからの生涯学習のニーズにどのように対応できるのかを検討する研究が早急に必要となってきた。

(2) さらに、すでに卒業生を出しているeラーニングによる通信教育課程をとりあげ、その卒業生に対する追跡調査を行う必要性も出てきている。

2. 研究の目的

(1) インターネットを利用したeラーニングが一般化しつつある。こうした背景の元に、成人教育学(Andragogy)が提示する成人学習者の特徴(実用指向性、学習資源としての社会経験、自己決定性)を考慮に入れたeラーニングによるシステムとコースをデザインし、それを実践することによって、これからの学習社会における生涯学習の具体的な1つのモデルを提示する。

(2) すでに卒業生を出しているオンライン大学をケースとして取り上げ、その卒業生に詳細なインタビュー調査をすることによって、オンライン大学のどのような点が卒業後の生活やキャリアに影響を与えたのかを明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 調査は、X大学通信教育課程の在学学生825名を対象とした。プレ調査は2011年5月9日～5月29日、ポスト調査は2011年8月4日～9月7日に行った。プレ調査、ポスト調査ともにオンラインによる回答を求めた。

プレ調査では、大学での学習やコミュニケーションに対してどの程度自信があるかをたずねる自作の質問紙「学生生活自信尺度」15項目について、「1.まったく自信がない」から「7.十分自信がある」の7件法で回答を求めた。ここで不安の程度を直接たずねなかったのは、回答者にネガティブな影響を与えないためであった。そこで、不安が軽減されれば自信が高まることにつながると考えられるため、「自信」という文言を使った。フェイスシートでは、性別、年齢、入学年度をたずねた。

ポスト調査では、「学生生活自信尺度」及びフェイスシートに加え、春学期のスタディスキルの受講状況についても回答を求めた。スタディスキルの受講状況は、第1回から第6回までの各コンテンツについて、「視聴しなかった」「視聴だけした」「視聴してホームワークをした」のうち一つを選択してもらった。プレ調査、ポスト調査ともに、LMSのアンケート機能を使用して実施した。回答時間は、プレ調査は約7分、ポスト調査は約12分であった。回答はいずれも無記名で行い、ラン

ダムなIDによってプレ・ポスト調査の回答者の紐付けがされた。

(2) 社会人学生が自己の人生の中で学びをどのように捉え、どのような動機や学業継続要因があったのか、また、大学の学びを通して得た意識変容をどのように認識していたかについて、協力者の語りを通して詳細に聴き取る必要がある。そのため、研究方法は質的研究法とし、調査は半構造化面接法を用いた。分析方法は、きわめて内省的な要素を含むデータを扱うため、データに則してまとめていく分析が適していると判断し、木下(2007)の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、M-GTA)を採用した。

また、分析は聴き取り範囲の広さ、取得データの量、質問に対する回答の内容から、「入学動機の分析」、「学業継続要因の分析」、「卒業後の意識変容の分析」の3つに分けて行うことが適していると判断した。なお、分析対象となる語りには、(1)協力者の心理的要素、(2)協力者の実体験、(3)協力者を取り巻く他者や諸環境にかかわる自己の物語が混在することが考えられた。そこで、分析ごとに、この3点の存在を意識しながら概念の抽出を行った。また、協力者ごとの回答データをもとに、M-GTAによって明らかにされた3つの分析結果を横断的に検討することとした。

(3) 都市部近郊にあるeラーニング授業を中心としたオンライン大学(以下「eスクール」と呼ぶ)を2007年～2013年に卒業した社会人学生753名を対象として調査を行なった。回答期間は2013年6月1日～6月30日(30日間)であった。回答は大学の学習管理システムのアンケート機能を用いて無記名で行った。

関・向後(2012a)の調査において、M-GTA分析による、社会人学生の大学在学時の学業継続要因と阻害要因について抽出された結果を参考に“入学して良かったこと”の14項目を作成した。選択肢は“1.まったく良くなかった”から“5.とても良かった”の5件法であった。同様に“入学して大変だったこと”の6項目を作成した。選択肢は“1.まったく大変ではなかった”から“5.非常に大変だった”の5件法であった。

つぎに、関・向後(2012b)の調査において、M-GTA分析による、社会人学生の卒業後の意識変容の分析について抽出された結果を参考に、“卒業後の自分自身に与えた影響”の9項目を作成した。選択肢は“1.まったく影響がなかった”から“5.非常に影響があった”の5件法であった。

また、eスクールで学んだことの満足度を評価する項目として、“eスクール入学を他の方に勧めたいか”を設定した。選択肢は“1.まったく勧めたくない”から“5.とても勧めたい”の5件法であった。

さらに、属性項目として、所属学科、性別、

年齢、勤務形態、家族形態、子どもの有無をたずねた。

4. 研究成果

(1) eラーニング制の社会人学生の、導入科目の受講前後における大学での学びに対する自信について調査した。その結果、以下の2点が明らかになった。

1) 新入生は、特に学習に対して不安を感じている一方、大学で学ぶことに対する周りの理解についてはそれほど不安を感じていない。

2) 導入科目のホームワークを実施した学生は、学習、大学内でのコミュニケーション、大学で学ぶことに対する周りの理解への自信が上昇した。

このことから、入学直後に大学で学ぶ際のスキルを導入教育で提供し、さらに実際に実習してもらうことによって、学生が大学での学びに対する自信を付けることに寄与できることが示唆された。

(2) 収集したデータは、3つの分析テーマを設定した上で、テーマごとに、M-GTAの手法に従い概念生成と具体例の抽出を行った。その結果、以下のことが明らかになった。

1) 入学動機の分析結果から、社会人の直接的な入学動機には、内的動機と外的動機があり、両者が複合的に働いていることが示唆された。また、入学を決意させる条件としては、学費、学習時間、家族の強い反対がない、eラーニングであることが挙げられた。

2) 学業継続要因の分析結果から、社会人の学業には、学習行動と心理面、人間関係、物理的・人的・制度的環境に関わる継続要因と阻害要因が存在することが示された。また、卒業に至った社会人は、阻害要因を最小限に留め、継続要因を強化する思考や行動を取っていた。

3) 意識変容の分析結果から、所定の単位を取得して、大学を卒業した社会人は、大学での学びや経験を経たことにより、人生全般においても種々の意識変容の認識があった。加えて、社会人の意識は学習だけでなく、取り巻く環境や他者との関係の影響を受けながら、種々変容し、自己の目標の達成に繋がっており、人生そのものにも意味をもたらしていた。

以上の分析結果を横断的に検討した。その結果、eラーニングで学ぶ社会人学生には、教員やメンターとの密接なやり取り、学友コミュニティとの関わりが重要であった。これらは、学生からも教員やメンターに支援の要求や相談が可能なくみ、学生同士が協調可能な学習形態など、学生と学習支援担当者間、さらに学生間のコミュニケーションを促す機会を提供するeラーニングにより実現可能であることが示唆された。

(3) オンライン大学を卒業した社会人を対

象として、社会人になって学び直すことが、卒業後にどのような影響を与えているのかを調査した結果、以下のことが明らかになった。

1) オンライン大学の満足度は、“学友との交流”と“思考力とスキル”が身についたことによって規定される。

2) “思考力とスキル”は“書くことの困難さ”を体験することで達成されると同時に“論文指導”も影響を与える。

3) 在学中に、“時間管理の困難さ”を経験することで時間管理のスキルが鍛えられ、卒業後の“仕事とキャリア”に影響を与える。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- 1) 石川奈保子・向後千春・富永敦子 (2013) eラーニングによる導入科目受講前後における社会人学生の学びに対する自信の変化『日本教育工学会論文誌』Vol. 37(Suppl.), Pp. 21-24
- 2) 関和子・富永敦子・向後千春 (2014) オンライン大学を卒業した社会人学生の回顧と展望に関する調査『日本教育工学会論文誌』Vol. 38, No. 2, Pp. 101-112
- 3) 田中理恵子・向後千春 (2014) オンライン大学生の卒業後の変化と満足度との関係『日本教育工学会論文誌』Vol. 38(Suppl.), Pp. 105-108

[学会発表] (計7件)

- 1) 石川奈保子・向後千春 (2011) eラーニングで学ぶ社会人学生のスタディスキル科目受講前後における学生生活に対する自信の変化『日本教育工学会研究報告集』JSET11-5 Pp. 17-24
- 2) 関和子・向後千春 (2011) eラーニング主体の大学に入学する社会人の潜在的動機に関する分析『日本教育工学会研究報告集』JSET11-5 Pp. 9-16
- 3) 関和子・向後千春 (2012) eラーニング主体の大学を卒業した社会人の在学時の学業継続要因の分析『日本教育工学会研究報告集』JSET12-3, Pp. 107-114
- 4) 石川奈保子・向後千春 (2012) eラーニングで学ぶ社会人学生生の初年次教育科目への要望および学生生活の状況『日本教育工学会研究報告集』JSET12-3, Pp. 115-120
- 5) 田中理恵子・向後千春 (2013) オンライン大学に入学した社会人の入学動機の分析『日本教育工学会研究報告集』JSET13-4, Pp. 73-80
- 6) 田中理恵子・向後千春 (2014) オンライン大学の学生生活に関する回顧と卒業後の変化『日本教育工学研究報告集』JSET14-1, Pp. 357-364

- 7) 田中理恵子・向後千春 (2014) オンライン大学に入学した社会人の学習継続要因 『日本教育工学研究報告集』 JSET14-4, Pp. 41-48

〔図書〕 (計 0 件)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

<http://kogolab.wordpress.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

向後千春 (KOGO, Chiharu)

早稲田大学・人間科学学術院・教授

研究者番号 : 00186610